

## ポチの散歩道

飯利 美知子

我家の愛犬ポチは、白に茶色のブチの雑種で五歳になる。以前の勤務園に迷い込んできた時、「さびしいの……」と目で訴えられた私が自転車のカゴに乗せて連れてきて、息子達が拾ってきた二匹の猫に続き三匹目のペットになったのだ。

ポチははじめ、「クン、クン」と甘えるように声を出すことはあっても、「ワン！ ワン！」と吠えることはなかった。自転車のカゴにスッポリ入るくらい小さかったポチが、どれくらいさ迷っていたのかは判らないが、閉ざされていた心が開かれたように「ワン！ ワン！」と声を出したのは、半年以上

が過ぎてからだだった。今では道に面した門から顔のぞかせ、「いつも誰かを待っているような犬」と言われて、町内の人や通学途中の小中学生に声をかけられている。

ポチが吠えるのは家の人に甘える時で、番犬にはなれないほどおとなしいが、一度だけケンカをしたことがあった。それは昨年の秋に、首輪を付けたまま捨てられたと思われる犬が町内をうろついていたので、かわいそうに思って庭に呼びいれ餌をやるうとした時、突然ポチが吠えて跳びかかったのだ。それまでは、自分の餌を食べられても「いいよ

……どうぞ……」と見ているだけだったのに、私ができるのは気に入らなかったらしい。予想外の出来事に呆然としてしまったが、その直後、目の上を相手の前足でガシッ！とやられて、アツケなく敗れ負傷してしまった。……そんな犬である。

私とポチはこの九か月の間、夏の暑さにも冬の寒さにもメゲず、雨の日とよほどの強風の日と出掛けた日以外は、四十分程の散歩をしている。……というか、仕事のない私の唯一の日課だったのだ。犬にも体内時計があるのだろう。二時頃になると、ポチは庭の真ん中で玄関を向いて座って待つことを始め、三時頃になると「もう行こうよ」と吠え出して催促する。出発の合図は、目と目を合わせてからの「よし！ 行こう！」との私の一声なのだが、この頃は目が合うとすぐ「OK！」とばかりに走り出し、「まだでしょ！」とダメ出しをされることが多くなった。

家を出るとすぐの所に「犬のとこやさん」があり、まずその二匹の犬に出会う。一匹はダルメシアンまじりの雑種で、もう一匹は茶色の毛がフサフサの雑種。まめに洗ってもらえるので、ホコリまみれのポチと違ってきれいだが、実はこの茶色のヤツがなかなかのワルと思われる。というのは、以前から時々「ポチの餌の器がなくなり、捜しまわると田んぼの真ん中とかずつと離れたよその家の車庫にあった」とかの珍事が起きていたのだが、犯人（犬）を目撃した人の話によると、どうもコイツらしいのだ。その家では散歩に出ることがなくしよつちゆう放されていて、うちの庭に入ってポチの器をもって行ってはアチコチに置き、知らん顔をしているようだ。黙ってもって行かれるポチもポチだが、「あんたね、きれいにしてもらって見た目はいいけど心の中にイジワル虫でもいるの？」と言いたくなってしまふ（対策として、器にヒモを付けて柱にしばり付けた）。

「とこやさん」から少し行くと、私達の姿が見えないうちから吠え出す犬が待っている。その吠え方はかなりのもので、シッポも動かさずに今にも飛びかかってきそうな勢いで騒がれてしまうのである。冬の頃、その犬の剣幕に本能を引き出されたのかポチも唸って吠え返すようになり、私は「ポチはいいの！ 黙ってなさい、いいのよ」となだめていた。

何が気に入らないのか怒ったように吠え立てる犬に、「何であんなにトゲトゲしているんだらう……」と、その犬の生活にアレコレ思いをめぐらせずにはいられない程なのである。

そこを過ぎると、私の好きな畑の一本道になる。季節によりキャベツ・ブロッコリー・白菜などになる畑が二百メートル四方はあるだろう中をゆつくり曲がりながらの細道は、子どもの頃のいなかの生活が思い出され、思わず「行くよっ！」と走り出してしまふ。そして、そんな自分達をパトラッシュとネロに重ねて、誰もいないのいいことに「忘れない

よ〜♪」なんて歌ってみたりもする。ハタから見たら「おばさんが犬に引っぱられている」としか見えないだろうと思いつつ……。

畑の道が終わると大通りに出てしばらく歩くのだが、その途中でやはり散歩の途中の近所の犬達に会う。

もう十歳を過ぎたおばさんのモモちゃんは、若いモンを簡単に寄せつけず、ポチも最近になってやっと吠えられなくなり傍にいくことを許された。雑種とはいえお嬢様として育ってきたモモちゃんは、いつも凜としていて、いつだったか風の強い日に出会った時は、「こんな風に負けないわ！」とでもいうくらい目をつり上げて前を向き、険しい雰囲気をもたせて歩いていった。

ベルちゃんはオスのシエッタランド・シープドックだが、気さくというかナントいうかポチに親しみをもってくれて、ポチもオスなんだけど、出会うとお互いの前足を絡ませて抱き合うようにしている。

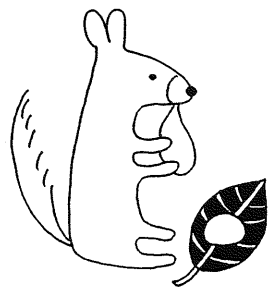
そのスマートな顔立ちからは知的な印象があるが、おもしろいことに「走れ」の言葉になぜか敏感で、私達の会話にその言葉が出ただけでダツシユしてしまったこともあった。育ちの良さが穏やかさになっているような犬なのである。

そのベルちゃんには、五年前に成犬のノラでさ迷っていたのを保護された、ロリちゃんというメスの同居犬がいる。ロリちゃんはポチ以上に心に傷を抱えていたのか、物音に怯えたり人間に強い警戒心があつて、家の人にさえ、うれしさなどの感情を表すようになつたのはついこの頃のことらしい。そして不思議な話だが、保護されてから病気になる入院させた時、十日程で治療費が二十万円を超えてしまったため、「ごめんね、これ以上は無理だから……」と死を覚悟して家に連れ帰つたところ、みるみるうちに元気になつたのだという。今ではまったくフツーに暮しているのだ。ロリちゃんは、いつも誰に対しても無表情でひっそりした感じなのだが、ポチ

にはじつとまなざしを向けてくれるように見える。

他にもいろいろな犬に出会うが、その中の小グマのような風貌の犬のこと……会うとやたらと吠えてくるその犬の飼い主は、ウンチ用の小さなシャベルで吠えるたびに頭をゴツン！ゴツン！と叩くのだ。加減のないその叱り方はこちらにまで音が聞こえる程で、私は思わず（そんなに叩かなくなつていいのに……叩いたからつて吠えなくなるわけじゃないでしょう）と心の中でつぶやいてしまう。やっぱり、犬だつて体罰だけじゃダメなんじゃないかな。

さて、帰り道では家のすぐ近くのヨシオくんといつてもらうことがほとんどない。それでもコーギーまじりの太ったヨシオくんはたまに放されるのだが、何故かポチの



.....

ところに来ては「ねっ！ 何してんの？」「何かしようよっ！」「ねっ！ ねっ！」という感じでじゃれつき、吠えまくり、はしゃぎ回って手がつけられなくなってしまうのだ。さすがにポチもうつとうしなくなるらしく、「帰れよっ！」とでもいうように吠えて嫌がり、私も「ヨシオくん！ もう家に帰んなさい！」と怒るのだが、何を言われても聞く耳もたずで、連れ戻されるまで我家の庭を走り回りオシッコもアチコチにする始末……ワケのわからんチンの犬なのだ。ただ、散歩の帰りに寄る時もスゴイ勢いで吠えてくるが、うれしさのあまりなのだろうことは、ちぎれんばかりにブンブン振れているシツポから伝わってくる。きつと、小さい時に親・兄弟とじゃれ合う経験がなくて、関り方を知らないのかもしれない。そんなヨシオくんには、「来たよー、何してたの？」「いいの、そんなにナカナクテ。また来るからね」と、なんとか穏やかに向き合えるようにと話しかけてしまう私である。

もう一匹のどん兵衛は十歳を過ぎたハスキー犬で、この種の性質そのままのノンビリした穏やかなおじさん。「どんちゃん！」と声をかけても「あー？ 誰だー？」と振り向くだけで、めったに吠えることもない。しかしこのどん兵衛にはとても気になることがあって、自分の小屋の出入り口のすぐ前にウンチ・オシッコをしてしまうようなのだ。そして、その量がいっぱいになると踏むのは嫌なのだろう……小屋から出られない状況になってしまいうらしい。なんとも情けない光景である。もしもうちの犬だったら、「ちよつと考えてみなさい！ ここじゃない所にしたらいいでしょ！」と怒られていることだろう。犬もこれくらいのことを考えないでいるのは損なものだと、どん兵衛を見ては思うのだった。

ところで、これまで登場した犬達の他に成犬のノラに出会うこともある。その犬達は、アテのない旅の途中のように枯れた草むらの陽だまりに寝ころんだり、通る人の後を追って人恋しさを表すのもし

て、拾いもののペットが三匹もいる我家ではこれ以上飼うのは難しく、その姿に切なくなってしまう。

ポチ達のように人と共に暮らし可愛がられている犬と、食べる物やねぐらを自分で探しまわりアテなくさ迷う犬がいて、それは小さな偶然により分けられた運命のようであり、如何ともし難い現実である。

そんなノラ達に、「この犬達はポチを羨ましいと思っただろうか……自分の身を悔しがって（何で可愛がられるのがお前なんだよ！）と腹を立てたりするだろうか……」なんてことも思わされてしまった。犬の思考はそこまでは及ばないのだろうけれど、それでもノラ達はその現実を生きるしかない……。

ノラ達の姿に、自分の現実にくすぶる思いをもっていた私は、「自分の現実をしつかり歩む」ことを教えてもらったと思っている。保育者として大切にしていた「一人ひとり違って当たり前」は、大人になると実生活や境遇などのさまざまなが絡んで

きて、時にはどうしても他者との比較になったりするものだから、「何故私は……」「どうしてこんな……」と自分を見失って嘆きになることがある。そして、そこから動けなくなってしまうたりもするのだが、「自分の現実を、喜びも悲しさも苦しさも全て抱えて歩む」ことを凜として成し遂げられるようにと、ノラ達の現実の厳しさを見て思うことができ

た。  
また、人がそうやって歩むためには、「自分を丸ごと包んでくれて導いてくれる大きな存在と、心を寄せ合う他者との関り」があるといいのだろうし、小さい頃の「愛された」というあたたかな思い出なんかも支えになるのだろう。

これは、「ポチの散歩道で見つけた尊いメッセー」なんだと思う。

（文中の犬の言動に関する解釈は、職業病的なものであることをお断りしておきます）

（公認・こもりや幼稚園）